

意見交換の概要
(平成 26 年 6 月 20 日(金)・宇和島市役所)

1. JR予土線の存続について

JR予土線の存続をお願いしたい。40年前に窪川駅まで線路がつながり、現在は予土線3兄弟等で売り出し、少しずつではあるがお客様も増えている。近永駅では10月に近永駅まで開通100周年のイベントが企画されており、強力な宣伝を県および関係市町をお願いしたい。サイクルトレインもそうだが、地元の人たちがあまりにもそういった情報を知らない。いくら宣伝物を掲示しても、駅に足を運ぶ人が少ないのではどうしようもない。そこで、県職員および沿線の人たちにも年に1回でも2回でもいいので、鉄道、バスに乗っていただき、その地域の情報を少しでも拾っていただきたい。

もし予土線が廃線になれば、鬼北町は、恐らく宇和島自動車が仕方なくその替わりになると思う。鉄道と並行しているところの運賃はさほど変わらないが、鉄道のない日吉方面は、JRの運賃の倍近くに広がる。バスはかなり高いので、お年寄りや高校生の通学、また、時々お酒を飲みに行かれる方にはかなり負担になると思う。予土線が廃線になると、次は予讃線の電化していない伊予市、宇和島間で、そうなれば宇和島は本当に島になってしまう。JR四国の企業努力も大切であるが、廃線の声が大きくなってからでは遅い。県および関係市町にも、一過性でない協賛および強力な宣伝をしていただき、どんどん乗って、将来の子どもたち、孫たちのためにも、今から100年存続できるようお願いしたい。

【知事】

まず、一つの路線を県が宣伝することは当然やるんですけれども、それが速やかに結果をもたらすかといったら、これは自信がないんですね。やっぱり事業主体が地域と連携して、どんなプランを立てるかということが一番大事だと思うんです。そういう意味では、先般の0系新幹線とか、トロッコ列車であるとか、非常に面白いユニークな試みを今されているなど、今度、伊予灘ものがたりをやられると聞いてますしね。ポイントは何かというと、よそがやってないことを先にやるかどうかにかかっているんですね。よそがやってない、ここで初めてということをやれば、当然マスコミにしたって旅行会社だって食い付いてくるわけですよ。今、ほとんどの人は便利さとか早さを求めているんですけど、それはもう不可能ですから、逆手でいけばいいと思うんですよ。日本一不便で遅いと、こんなゆったりとした空間、鉄道の旅はないですよ、というのを前面に出すような企画に持っていったほうが、僕は逆にインパクトがあるなど。サイクルトレインというのは、実はJRの本社にも何度も掛け合っただけです。最初、ものすごいハードルが高かったです。「他がやってないから、やりましょうよ」と。JR本社の答えは、「他に前例がないから」と、ここから入ってくるわけですよ。前例がないからいいんですよ。例えば、予土線の現状見たら、通勤、通学の時間帯は別なんだけど、あとの時間はすいているわけですよ。ちゃんと統計を取れば、絶対的なすいている時間帯、ゾーニングというのが必ず出てくるはずですから、何曜日のこの時間帯は、自転車、車両を中に乗せられますと、日本でここだけですとやったら勝ちなんですよ。そしたら、それは県としてもバーンと打てるので、「是非、やってください」というんだけど、やっと「追加の車両に乗せましょう」という段階なんですよ。そのぐらいだと他もやっていますから、インパクトがないんですよ。お金取ったっていいんですよ。通勤、通学はまた別ですけど、サイクリストなんかは、4、5百円取っても乗せられるんだと、空いてるところに乗せるというのは絶対文句出ません。「何でかな」と僕なんか思うんですけど、聞くと前例がないのと、車内でちょっとした事故や怪我でもあったら、誰が責任を取るんだろうかというところで止まっちゃうわけですよ。でも、そこらあたりは、いくらでも乗り越えられる

知恵があると思うんですよね。だから、是非、現場からも「空いてる時ぐらい、乗せたらいいやないか」と、どんどん声を上げていただきたいなど。JRの社長さんに会うたびに、この話をしているので、社長さんはその気になってます。でも、現場が「いや、前例がない」と、ここで終わってるんですよね。是非、よろしく願い申し上げたいと思います。もう一つの提案としては、例えば、地域の老人クラブとか、いろんな公民館の動きとかがあると思うんですが、その方々に向けて予土線内での小旅行の格安パッケージ、JR鉄道を使ったパッケージを作るとか、そんなことやってもいいんじゃないかなと思いますので、是非、アイデアの一つとして検討していただけたらと思います。

2. 平和の鐘を活用した宇和島市の活性化について

小中学校のPTA活動として平和学習を実施や、国際平和デー宇和島実行委員会の事務局をしている。宇和島には平和の鐘があり、日本が国連に入る前に愛媛県から国連に送っているが、国連で会議があるたびに、その平和の鐘を必ず打つ。国連は一つの国から一つのものしか受け取らないが、砥部の白瀧八洲彦さんの「生命の碧い星」という作品も、ニューヨークではなく、ジュネーブの本部のほうに送っている。なぜ宇和島が平和の鐘かというと、当時市長の中川千代治さんが、平和のために何かをしたいということで、市制50周年の時に平和絶対都市宣言を条例として作っている。合併後、それが宙ぶらりんになっていたが、去年、石橋市長がもう一度議会に上げ、条例としてまた定めることになった。今年、平和の鐘を国連に送って60周年に当たるので、国際平和デー宇和島実行委員会での式典を行うよう、段取りをしているが、宇和島の平成の平和の鐘を市民の力で作り、それをオリンピックに持って行き、知事がオリンピックでたたくという構想を考えている。世界のコインや寄付を集めて、宇和島市民レベルで、その平和の鐘を作っていきたい。国体もオリンピックもあるので、その平和の鐘を打ちに、世界中から宇和島に来ていただくという構想に是非賛同していただき、平和のまちとして活性化ができればと考えている。

【知事】

実はこの前スイス行ってきたんですけども、ジュネーブのほうでは巨大な砥部焼青磁が、本当にいい場所、目立つところに飾られていました。そちらの話は知っていたんですけども、ごめんなさい、ニューヨークの平和の鐘は知りませんでした。問題は、まず、宇和島の市民の皆さんが、ふるさとのそういった歴史価値にどれだけの人が気付いているのかどうか、まず、ここが一番大事なところだと思うんです。かつて松山で坂の上の雲のまちづくりをやった時に、スタートの15年前の時点で、松山市民で読んでる人なんかほとんどいなかったんですよ。ともかく、地域に出向いては、なぜ坂の上の雲なのか、どういう中身なのか、なぜこれを取り上げたのかというのを、毎週毎週、当時市長として広めることにもものすごい力を入れてました。やってるうちに、「何か、面白そうだな」となってくると、その人たちが、それを外に広げるといのが目に見える。右肩上がりにはいかないですね、横ばいの状態が続いて急に上がるということの繰り返しですよ。そこを我慢しきれるかどうかが、いいタイミングの時にテレビドラマが重なったので、そこから先はドーンといったんです。まちの魅力を外に知ってもらうためには、地元の人その価値を知ってるかどうかということが一番大事なポイントだと思います。次に、これ市の話ですから、市長さんが、例えば、僕らがこれをアピールするんだと決めたら、外に行った時、とにかくがんがんやるわけですよね。市長さんが外に向かってそれを言い続けることをしていただかないと、多分広がらないと思うんです。その空気ができたら、「ああ、あそこはそういう地域らしいね」というイメージができてきますから、その時に鐘というのが認知されるようになると思うんです。なぜこれにこだわるかといったら、「実は日本から唯一、ニューヨークの国連本部で

使われてる鐘が、宇和島から日本が国連に入る前に送られてるからなんですよ」というのを、言えるわけですよ。そうすると、「ああ、あそこがそういう歴史を持つてるんだ、あの鐘だね」というところで、やっとながって来ると思うので、当面は、今言った宇和島市民の中でどれだけ広げられるか、それから、市長さんお骨折りだろうけども、そのために宇和島を走り回り、そして、外に向かってしつこいぐらい言えるかどうかが鍵を握ってるかなと思います。その空気さえ作れてれば、県のレベルで、またいろんな後押しができるんじゃないかなと思いますね。

3. 空き家の利用促進について

昨今、空き家の問題が取り上げられるようになってきているが、私達の仕事でも、最近遺品整理、片付けの仕事が増えている。ある日突然親が亡くなられたり、施設に入るといった際、50代、60代の子世代が実家の片付けを迫られる。そして、片付けた後、子世代の方は、都会のほうで生活しているため、その家は空き家になってしまう。解体や撤去も大事であるが、空き家の利用促進が大切だと実感している。最近、宇和島市津島町のほうで、遍路宿ということで取り組まれている方もいると聞く。南予だけの問題ではないではないと思うが、今後、空き家に対する利用促進をどう考えているのかお聞きしたい。

【知事】

ベストアンサーがあったら、本当に楽なんですけどね。どこのまちでも、日本全国、共通の課題になってきていて、もっと深刻なのは、これから少子高齢化の影響がもろに出てくる、人口減少社会に入っていくわけですよ。今、日本の人口は1億2,000万人いますけども、30年、40年経つと、9,000万に減るだろうと。全国減るんですけど、愛媛県、今、140万切ったんですよ。今まで多分150万県民という言葉が、結構皆さんの中にあっただと思うんですが、もう既に139万なんです。宇和島市でもさっき誰か言ってましたが、1日に二人ずつ減っているという状況のはずなんです。今のままいくと、愛媛県がやがて106万人ぐらいになるんじゃないかと、そういうことを考えると、空き家もまた増えていく可能性があるんですよ。この活用は並大抵なことではないんだけど、結局のところ、地域経済を潤すという観点で考えることが一つ、それから二つ目が、何らかの地域のコミュニティの用途で使うという観点だと思うんですよ。

これは地域によってできるところとできないところがあるんですが、一つの成功例が徳島県にあるんです。神山町という山の奥、実はこの前行ってきたんですよ。ここがラッキーだったのは、近くまで高速ブロードバンドが来てたんですよ。空港からは確か1時間ぐらいのところだったんですけども、今、そこで何が起こってるかという、東京、大阪のIT企業のサテライトオフィスが続々と進出して、今、十何社来てるはずですよ。行ってみてびっくりしたのが、全部空き家を使ってるんですよ。一見空き家なんですけど、ちょっと手を入れてガラスの面積を多くしたり、それから古い蔵があったんだけど、中を開けてみたら最新のサーバーが入ってたり。外から見た印象と中の設備ややっている業務は別ものなんです。何でそんなのが来たのかという、全部のエリアじゃないですけど、たまたまそこに容量の大きいものが来ていて、使ってないんですよ。光ファイバーとよく言うんだけど、ダークファイバー、暗いファイバーというのは、使ってないから真っ暗なんです。道路でいえば、歩道、自転車道があつて、車道があるんだけど、歩道と自転車道しか使ってない、車道が丸空きになってたんですよ。だから、日本最速の環境が整ってるんですよ。複雑であればあるほどデータ量が多くなりますから。今そこで中心になっているのが、4K、8Kの映像、膨大なデータ量です。ドカーンと送れたら、サアアアと行っちゃうんですよ。むしろ受け止める東京のほうで大混雑するんですよ。そこにIT系企業が目を付けて、しかも家賃が安いわけですよ、空き家、ただみたいなもんですよ、改造費だけです。そういうものと

組み合わせて、今どんどん空き家が埋まってる。これは町が率先してやったわけじゃないんです。住民の皆さんが主役となってやったんですよ。どんどん人がいなくなって空き家が多くなって、「これ、どうならい」と。もう開き直ったらしいんですね。「うちの町には一体何が必要なんだろう」というのをみんなで議論していった先に、「そういえば、今言ったようなものがあるから、こういう企業がここへ来てくれる可能性はあるんじゃないか」と。営業をやって、そのうち埋まってくると、「何か、これだけ人も増えてきたから、おいしいレストランが欲しいね」といったら、「じゃ、どっかでレストラン見つけてこよう」といって、県外の人だって言ってましたけど、今年から東京で修業した女の子が来て、フランス料理屋を始めたんですよ。それも空き家使って。そうやって、何かを作っては「足りないものは何か」と議論して、埋めるために営業しようと、住民が動いてるんですよ。これなんかいい成功例で、ちょっと特殊かもしれないですけども、市も大事、町も大事なんだけど、やっぱり住民の思いというのがすごく大事なんだなということを感じましたね。答えになってないかもしれないんですけど、「どうやったらいいんだろう」、「何が必要なんだろう」、「何をやったらここに定着するんだろう」というのをみんなで議論して、ターゲットを絞ることによって、道が生まれてくる可能性は十分あるような気がしますね。

《補足》〔企画振興部〕

「地方へ新しい人の流れをつくる」という国の総合戦略に基づき、従来の移住施策に加え、平成27年度より、地域住民の主体的な取組みを支援し、移住者受入体制の強化や情報発信力の強化等により、更なる移住者の呼び込みを図ることを検討しています。

〔検討内容〕

- 東京に専任移住相談員を設置（相談窓口、情報発信等）
- 現役世代及び将来の子育て世代となる若い移住希望者をターゲットとした本県単独移住フェアの実施
- 空き家利活用の課題解決のためのノウハウ収集及び分析
- 空き家バンクの充実

4. 滑床キャニオニングの状況及び愛媛県の林業の取組みについて

滑床のキャニオニングでは非常にお世話になった。時間の関係上、知事に一番スリリングなコースでやっていただいたが、本当に感謝しており、キャニオニングのほうは非常に順調である。今、地方局から事業委託を受け、南予全域、四万十流域も含めて、アウトドアエリアとして発信していくという取組みをしている。山奥に暮らしたくて東京からIターンで来たが、山奥なので当然職がない。最初は養鶏をしていたが、いろいろ地域資源を探していく中、滑床のキャニオニングには潜在的な需要があるということに6年ぐらい前に気づき、それができたのがいやし博という契機で、これがなかったら本当にできなかったもので、感謝に堪えない。

南予は1次産業が活性化しないといけない。若者の定住という意味でキャニオニングをやっているが、地域のコミュニティとしてはなかなか活性化しない。移住して15年ぐらいたつが、地域のコミュニティが衰退していくのをどうやったら止められるか考えた時、また、1次産業を発展させるという時、ポイントは林業だと思っている。林業には潜在的な可能性が非常にあると思うが、これを生かしてないと感じている。林業の活性化は高知県でもやっていて、全国的に取り上げられることが多い四万十町の四万十式作業道などにも関わっているが、道づくりを見ている、愛媛県の取組みはまだまだこれからではないかと感じる。県としてどんな取組みをするのか、知事の御意見をお聞かせ願いたい。

【知事】

林業なんですけど、愛媛県民がほとんど知らない事実というのがあって、一昨年まで愛媛県はヒノキの生産量が日本で一番だったんですね。5年連続ヒノキの生産量日本一が愛媛県です。去年は4位に落ちてます。杉は9位ぐらいだったと思うんですけども、高級木材であるヒノキが、最も生産量が多いというのは、ほとんどの県民の皆さん知らないんですよ。知られてない原因の一つは、名前が付いてないからなんですね。例えば、杉というと秋田スギとか、屋久スギとか、ヒノキというと木曾ヒノキとか、こういう名前は、ほとんどの人が知ってると思うんですが、愛媛県でヒノキが日本一だといっても、そのブランド名というか、名前は全くないんです。2年前に林業関係者を集めて「僕は売るけども、ともかく売りたいので、ある一定の規格が保証されたものについては、共通のブランド名を付けましょうよ」、例えば、「媛すぎ」「媛ひのき」とか、「何でもいいですから、そういう名前付けましょうよ」と言って、業界の団体の皆さんの前で話したんですよ。数カ月後、皆さんまた来られまして、命名しましたと。「知事が言った「媛すぎ」、「媛ひのき」をそのまま使わせていただきます」と。今、「媛すぎ」、「媛ひのき」という名前になって、売り込みをかけてます。実は去年、何で4位に落ちたかということ、今まで愛媛県というのは、間伐材中心だったんですね。今、木が大きくなってきて主伐、元の木がちょうど今出荷できるような時期に来てるんですね。それは、全国でも同じようなことで、それでも、愛媛県は山の間伐を優先させようと、間伐ばかりやってたんです。それでも、5年間1位だったんです。去年から他県は主伐を始めたんですね。ただ、闇雲に、民間中心で主伐をやっているの、調べてみると後は野となれ山となれで、切って終わってるんですよ。そこで、うちは1位を取り戻すために、去年から、林業躍進プロジェクトという、期間限定の事業を立ち上げます。それは、愛媛県も主伐に入ると、ただし、やりっぱなしにはしないと、山を生かすために再造林をする助成制度を付けましょうと。だから、皆さん主伐に踏み込んでください、かつ再造林はちゃんとやってくださいと。山を生かしましょうというプロジェクトがスタートしてます。これがまず第一点なんですね。もう一つは、やっぱり人なんですね。どんな業界も人材が大事ですから、3年前から久万高原町に、愛媛大学大学院の林業コースを設置しました。これ、学生枠と社会人枠両方あって、山トータル管理、運営からビジネスにつながることを研究する専門家の育成に力を入れようということです。この林業のコース、大学院を持つというのは、愛媛だけです。高知大学もこっちに協力するという体制にしています。

もう一つは、需要の問題なんですけども、どこでもやってるようなことは既に行ってます。例えば、リフォームの県産材使用に対する助成制度。それから、今度、新たに提案しようと思ってるのが、木材住宅の耐震化と、それに伴う改修工事へのバックアップ制度。これを立ち上げて県産材の利用につなげたいなと思っています。それでも、限界があるんですね、大きな目で見ると、新しいマーケットを作るしかない。今、注目してるのがCLT工法という工法なんです。これは今、国は研究段階で、どういうことかということ、今までの集成材は、縦に貼り合わせてやってるんですね。これは日本で認められた技術、縦に貼り合わせて集成材を作って出荷してると。ところが海外は、20年ぐらい前からクロスに貼り合わせる集成材を許可したんです。クロスに貼り合わせると何が起こるかということ、耐震性が格段に上がるんです。防火対策にも強いので、海外では、もう認可されたんです。どれぐらいの強度を持ってるかということ、ヨーロッパでは、木造の10階建てのビルまで許可が下ります。それぐらいの強度があるんですね。ただ、日本の場合はヨーロッパなんかと比べると地震が多いので、多分マックス5階建てぐらいまでかな。でも、この工法が認められたら、木材需要は飛躍的に増加するんですね。今、国もようやく前向きになって、一刻も早くこの技術を認可しようという動きが出始めたところなので、今、先手を打ちたい。高知は若干民間が先手を打ってるんですけど、一番前を走ってるのは岡山県の会社なんですよ。岡山県の会社が、このCLTに早くから目を付けて、既に自社工場で実験工場を作ってます。自動的にクロス貼りができるようなものも導入して、国の試験研究機関みたいな役割

も担ってるんですね。ここを引っ張り込みたかったので、先週、岡山まで行ってきました。まあ、遠かったですね。片道3時間半かかりましたから、東京に行くほうがよっぽど近かったんだけど、行って社長と直に会ってきまして、愛媛でもこういうことやりたいんだと。6月、7月中に愛媛CLT研究協議会というのを業界団体の皆さんが立ち上げるので、岡山と愛媛今までなんの関係もなかったけども、「社長、是非、顧問に就任していただきたい」と言ったら、山奥まで行ったというのもあって、OK取れまして、これは来月にも立ち上がります。2年後ぐらいに、もし認可が下りたら、すぐにスタートが切れるような体制、これは山の関係者、それから切り出し、市場、製材業者、販売、住宅と、全部川上から川下まで、チーム愛媛で組織体を作っておけば、いざスタートの時に、どこよりも早くダッシュが掛けられるので、今、そんな準備に入っているところであります。このCLTのもう一つの側面というのは、例えば、集成材でクロス貼りにするんですけども、今までだったら捨てていたちょっと黒っぽい杉も、中で全部使えるそうです。その強度実験も全部終わっていて、今度クロスを採用することによって、そういった木が入ったとしても、強度が変わらないという検査結果も出てるので、今まで捨てた木も使えるという需要が生まれる可能性があります。ここは本当に日本の林業における、ものすごい大きな分岐点になるんじゃないかなということを見越して、手を打ち始めているというのが現状です。

5. 地域活性化に向けた人づくりについて

青年会議所の中にカタリバ i n 宇和島実行委員会というものがあり、行政主体から始まったものを我々民間が引き継ぎ、継続事業として続けている。メインは高校生の育成事業で、与えられた環境の中で育ってきた子どもたちが、自分たちの足で歩いていくため、社会人や大学生といった方々と触れ合い、語り合うことで、将来を見据えて意識変化が起こるきっかけを与えるというイベントを実施している。その事業の裏の効果として、社会人や、なかなか地域づくりに参加できない方々が、こういった簡単な分野であるカタリバという高校生と接する入り口に参画していただくことにより、今度は、翌年スタッフに加わっていただくことで、新しいメンバーも増えていく。また、地域づくりに貢献することの良さを分かっていたいただいた社会人や大学生などもどんどん増えている。

先ほど知事も言われたとおり、まちづくりは人づくりからということで、地域に住んでいる人たちが立ち上がらないといけないと思うが、そういった人口を一人でも増やすという活動というのが一番苦戦するところである。結局、何か立ち上がっても「あっ、やっぱ、またあの人がやってる」とか「あの人がいる」とか、結局同じ人たちがいろいろ立ち上げて、忙しい人だけがどんどん忙しくなっていく状況がある。いいイベント、いい事業を立ち上げて、第一回で終わってしまうこともある。人の問題、お金の問題など、いろんな原因があって続かないと思うが、今後成功事例を作っていきたいと考えている。人材を育てるところで、地域活性化につながる方策や考えなどがあれば教えていただきたい。

【知事】

松山市長時代の経験なんですけども、行政主体、住民参加にみんな慣れて来ちゃってるんですね。かつ、行政側も「知らしむべからず、由らしむべし」で、面倒なことになるから、あんまり細かい情報を出さないで、とにかく「行政の言うこと信頼してくださいや」というところで、やつつけ仕事みたいな側面は、今までどこの地域でもあったと思うんですよ。そこに、そうした一歩、まちづくりのジャンルから引いてしまう人たちの増やしていった原因があるのかなと、当時思ってたんですね。これを変えるというのは並大抵なことじゃないなと思ったので、どうすればいいかということ、刺激的なことをやるしかない。変えるために嫌われ役を買って出るということをやりました。例えば、商店街の例でよく出させてもらうんですけど、松山の中心部にロープウェ

一商店街というのがあるんですね。僕が就任した時は汚なかったんですよ。ぼろいアーケードがあって、電線がバリバリあって、店の景観も全く不統一、かといって文句ばかり言ってくる。小さい商店街なんだけど三つに分かれてるんですよ。何で分かれてるかという、昔、どここの店とどここの店がけんかして、「あいつがいたら俺はやらん」といって、人間関係がぐちゃぐちゃになって三つになったんです。就任した時に、A、B、Cとすれば、A地区が「市長、こういうことやってくれ」、B地区がまた別の日に来て、「B地区はこれじゃ」、C地区はまた別の日に来て「C地区はこれじゃ」と、ばらばらなこと言ってくるんですよ。訳が分からなかったの、全員に同じこと言ったんです。「こんな短い商店街で、協力もできないような、それぞればらばらなこと言ってくるような地区に、市民からお預かりしている税金は市長としてびた一文使わない」と。「予算ゼロでっせ」とね、いきなり言いました。怒った、怒った、「なんぞ、おどりゃ」ってね。「いや、おれ知らんと。関係ないもん、しがらみないから」と。別にフリーで出て市長になったから、「知らんですよ」、「これ方針なんです」と。「その代わり、三者がまとまって、同じ方向で力を合わせるっていうふうになったら、120%応援します」、「要は120%応援するかゼロかどっちかです」と。「中間ないんでっせ」と言っ、2年間本当に予算ゼロにしたんです。そしたら、その商店街の人たちが大騒ぎになって、「あの野郎は、本気でやりやがった」と言ったんだけど、このままじゃ駄目だと、みんなでもとまろうやという空気が下から湧き起こって、役員さんも全部変わって、三者が一緒になって来たんですね。「こういうふうになったんで、約束どおり応援してくれ」と言うから、「ああ、いいですよ。それは約束だから。ところで何やります」と言ったら、「商店街をきれいにしたい」と。「あなたたちきれいにするっても、覚悟はできてますか」と言ったら、「やる」と。やったことはアーケードの撤去、電線の地中化、店の景観の統一。特に「店の景観の統一は自費でやってくださいよ」と。「そうじゃないと公金は入れられない」と言ったら、「全員は無理だ」というので、「参加率、ノルマ90%だ」と。「90%以上の統一景観自費支出の協調体制が取れない場合は、大義名分が立ちませんから」と言ったら、それ以上の94%となりました。それでも、数%いましたけど、ほぼ100%に近い方々が景観統一に立ち上がったんです。「悪いけど、これ大掛かりな工事になるんで、皆さん覚悟してくれ」、「多分工事期間、2年はかかりますよ」と。「その間、売り上げ激減しますが、覚悟しといてくださいね」という話でスタートしました。そしたら、2年間本当に激減したんですけど、誰も文句言っこないんですよ。今までだったら、行政が工事して売り上げが落ちたので、「おまえ、どないしてくれるんぞ」となるでしょ。それが無い、なぜかといったら自分たちが決めたから、「踏ん張るんや」と。2年間たってどうなったか、改装後は通行量が3.6倍ですよ。空き店舗いまだにゼロです。がらりと変わって、県外からも、商店街の成功例として見に来るような場所になりました。商店街の方々の意識も変わって、今度はこれをどう生かすかということで、毎年大がかりなイベント、城山門前市というのをやってるんですけど、行政の補助金はゼロです。もう全然出してないですね、やっぱり自主的な力ってすごいんだなと。でも、それを引っ張り出して変えていくには、やっぱり誰かが嫌われ役をやらなくとなかなか難しいかなということが、その時の実感でした。

まちづくりとは全然関係ないんですけど、嫌われることを覚悟すれば、いろんなことできるんですね。例えば、僕、3年半前に県庁に初めて来た時に、県庁って何かすごい敷居が高いというイメージがあったんですよ。市長の時でも、それ感じてたんですよ。これは一発、何か嫌われることやろうかなと思って、最初に就任して知事になった時に、今日から知事の仕事始まりましたけど、職場である県庁に来てどんな印象ですかと、一発目言ったのは、「県庁の人は暗いですね」と言ったんです。（県職員に対し）言いましたよね。みんな何か怒るわけですよ、「暗くない」って。「いや、暗くないんだったら、態度で示してください」と、「挨拶もしっかりやってくださいよ」と言ったら、何かどンドン変わっていくんですよ。ある時、変わったなということを実感できる瞬間があって、600人ぐらい県庁の人が集まったので、「いや、すいませんで

した」と。「僕、就任して6カ月前に皆さんのこと暗いと言ったけど、今日の姿を見てたら、それは間違いだったなと実感してますので、発言を撤回し、心から謝罪を申し上げます」と言ったら、大拍手が起きましたけどね。空気変えるというのは、やっぱりそれぐらいのエネルギーは必要なのかなと思いますね。

6. 生活研究協議会の活動への補助金について

全国の各農業委員会委員に女性を一人は登用するというので、私がならせさせていただいたが、一人では何もできない。町にもう一人か二人お願いしたいと言ったら、一人で精一杯との回答だった。去年、愛媛県に女性農業委員の会ができ、皆さんが活発に活動していることに刺激を受けるが、いざ町に帰ってきてやろうと思うと一人では難しい。また、私は生活研究協議会役員もしているの、そこと連携しているが、生活研究協議会の食の教育や食文化講座の予算が年々減っている。今、知事が予算などを当てにしないで、自分たちで頑張るよという趣旨のこと言われたので、聞いていてそうだなと思った。松野町も、食文化講座として、グリーンツーリズムの子どもたちが来たら、そこでできるだけ松野町のものを使って、食事を提供したりしており、また、鬼北町もメンズエプロン講座や、小学生に伝統食を伝えたりするなど、頑張っているのに、予算が減っている。県の財政が苦しいことは理解しているが、大した予算ではないのに減ったということは、自分たちの活動が認められていないのではないかと思うので、その理由を知りたい。

(司会／広報広聴課長)

予算というのは県から何か補助金みたいな・・・

(参加者)

県の補助金です。

【知事】

基本的に細かいところまで分からないんですけど、4年ぐらい前まで、都道府県は、緊急宣言を出さざるを得ない状況になったことがあるんですね。それはなぜかということ、御記憶にあるかもしれませんが、国が行った三位一体の改革だったんです。この三位一体の改革で何が起きたかということ、国から地方に権限と財源を移しますということからスタートしたんです。これだけ聞くといいでしょう。国から権限も財源もきて、自主的にやれる体制が取れると、「大歓迎や」とみんな言ってたわけです。所得税は国に入りますよね。住民税は地方に入りますので、所得税を減らして、その減った分、住民税を上げたんです。皆さんの負担は変わらないんですけど、国に入る分は減って、地方に入る分が増えるという操作をやったんです。これはこれで良かったんです。ところが、国がもう一つやったのは、国から地方にいつている補助金を、その代わりカットします。交付税というのは、ちょっと専門的なルールなんですけど、これもカットします。地方が増えた分と同額をカットするんだったら問題なかったんです。ひも付きのものが減って、自由に使えるものが増えるという話でしたから。ところが国は、どさくさに紛れて、国から地方に所得税から住民税でちょっと大きな金額なんですけど、2兆4,000億円移したんです。2兆4,000億円、地方の収入が増えたんです。こちら側で削ったのが2兆4,000億だったらバランスが取れていたんですけど、3兆6,000億円削ったんですよ。一気に1兆2,000億円、国の借金が地方に付け替えられたという結果になったんですね。たちまち万歳したのが夕張市だったんです。一気に倒産しちゃったんですね。それに続くようなところは、まだいまだにいっぱいあるんですね。それを受けてどうしようかという時に、市町村合併で乗り切るしかないというのが、あの当時の実態だったんです。特に都道府県に入ってくるお金が、景気も悪かったので激減して、職員の給料も満額払えなくなっちゃったんですね。そこで、当時、県として全ての予算を、補助金含

めて自動的に何%カットせざるを得ないということがあったんですね。今はだいぶ回復してますので、そういう一律カットというのはやってないですよ。その代わりに、僕の気持ちとして、やっぱり機械的なお金ではなくて、さっき言ったように生きたお金を使いたい。生きたお金というのは、去年これだから自動的にというものではなくて、こういうことをやるからバックアップしてくれと。なるほどというのは絶対生きるお金で、それは全然減らしてないと思うので、何でそんなになってるか、ちょっと具体的に分からないんですが。

(参加者)

アピールをしないといけないですね。

【知事】

そうですね。絶対そう思いますね。是非、お願いします。

それから、松野町で僕が一番感心してるのは、桃源郷マラソンなんですよ。これは、二度ほど走らせてもらいましたが、すごいいいですね。人口4,000人の町に出走者が3,600人ですからね。町民と同じだけの人が出走してるんですよ、あり得ませんよ、こんなの。ハーフマラソンの大会で、一番素晴らしいと思ったのが松野桃源郷。2番が西予の野村町の朝霧湖マラソン。それを今度東予にないから東予に「つくれ、つくれ」と言って、今、「やってみよう」と、今年はまだ500人ぐらいですけど、生名島というところが初めて取組みを始めました。さっきの話と重複するかもしれないですけど、マラソンにしたって、そういうイベントって、人が来るようになればその町の特産品をPRするチャンスなんですよ。いやし博の時もよく言ったんですけど、「皆さん、イベントで人が来たら、できるだけファンを作ってください」、「可能であれば、住所や電話やメールアドレスを手に入れてくれ」と。「それが一番効率のいい顧客リストになるんや」と。「そういうために、イベントというものはあるんじゃないですか」という話を、行く先々でやっただけですけども、あの桃源郷マラソンなんか、確実にリピーターが生まれるね。大人気の大会で、あんなにみんなで力合わせられるじゃないですか、できますよ、絶対に。

《後日回答》〔南予地方局〕

県が委託している「えひめ食農教育推進事業」の委託料については減額になっておらず、同事業と併せて愛媛県農山漁村生活研究協議会が下部組織に独自に助成していた別事業が26年度から廃止されたことで、全体の助成額が減額となっていたことが判明したため、その旨を説明しました。

7. 真珠を活用したまちづくりについて

私たちの団体は、海の恋人まつりという商店街の活性化、また、愛媛の真珠のブランド化を実施していこうと始めたボランティアスタッフの集まりである。海の恋人まつりは3年間行政が行い、その後、私たち民間が引き継ぎ、パール王子、パール婚式といった形で行っているが、今年も9月28日に青年会議所などと一緒に実施するお城まつりと同時開催する。市からも微々たる補助金をいただくが、あとは私たちが企業に頭を下げて協賛金をいただいて実施している。補助金は、例えば100が3年間でなくなるのではなく、20を10年間ぐらい続けていただければ、使いやすいものになると思う。パールについては、別の企業組合でパールエステというものを商標登録している。イベントでは食べ物売れるが、化粧品やパールエステはいつも悲しい思いをして帰ってくる。例えば、サイクリングをして疲れるのであれば、人の手で癒やすパールエステはすごく広がるのではないかと。県がサイクリングに力を入れるのなら、足でもいいと思う。応援のCMは、最初の3年間はテレビやラジオでやってもらったが、その後は予算がなくできないので、そういうバックアップをしていただけたら助かる。商店街が大変なことになっている中で実施するお祭りであり、そういうところにお力を貸していただき

い。

【知事】

真珠もさっきのヒノキと同じで、愛媛県の人たちですら、真珠が日本一というのをどれだけの人が知ってるんだろうと。恐らく松山市民あたりだったら、ほとんど知らないですよ。多分、真珠は三重県じゃないのというイメージなんですよ、「えっ」ってみんな言うんですよ。今年なんか、多分47～48%のシェアを宇和島が持っているぐらいのレベルなんですけども、同じですよ。PRの仕方、ちょっと何か工夫があるんじゃないかなと、みんな奥ゆかしいんですよ、本当に。特に南予の皆さんは、PRということに関してはちょっと一歩下がり気味のところがあつたんじゃないかな。同じ県内でも、東予の人たちはガンガンいきますからね。例えば、四国中央市だったら、「わがまちはね、紙の生産量は全国の市で一番だ」と、みんなガンガン言うんですよ。同じように何で言わない、もったいないのになというところがあるので、是非、まずそういう空気を作ってほしいなと思うんです。今、県職員もみんな真珠のバッチを着けるようになりましたけど、きっかけは、「これだ」と思ったのが、3年前の就任直後に見つけたブタと真珠の組み合わせだったんですね。ブタに真珠という組み合わせを県外に宣伝すると、ほとんど食い付いてきます。みんな欲しがりますよ。最初はそれでいいんです。次にいいものを、次にいいものをと、どんどん膨らませていったらいいんですから。これは自転車にすると、真珠を二つ使いますから、値段が上げられるんですよ。そうやってバージョンアップしていけばいいんです。真珠の魅力に取りつかれた人は、さらに高いものが欲しいとなっていくので、そういう積み重ねの戦略も大事だと思うんですね。パールエステというのは、僕も自分がやったわけじゃないので分かんないんです、イベントでは知ってましたけど。

もし、自転車に絡めるんだったら、ネットをうまく使うというのが大事だと思います。(タブレット端末を見せながら) 実は先月になるんですけど、本当にたまたま東京の飲食店で知り合った人なんですけど、日本マイクロソフト株式会社という会社、ウィンドウズとか作っているところね、その社長さんと出会って、自転車の話をしたら、「それ面白い」と、「マイクロソフトとして社会貢献をする事業があるので、これ全面的に協力しましょう」ということになりました。既に先月からアップされてるんですけど、「愛媛マルゴト自転車道」というコンテンツが出来上がってます。これ全部マイクロソフトが無料で開発してくれたんです。ここには、コースガイドからおすすめ情報とかいろいろあるんですけど、まだ、立ち上がったばかりなので、これからどんどん増えていきます。例えば、立ち上がりの段階では、スマホのアンドロイドしか使えなかったんですけど、もうすぐ 아이폰 も使えるようになります。これ、ログインで参加する形で、愛媛のこの26コース、全部コースガイド、動画付きです。これらを走った思い出の写真なんかをどんどんアップできて、情報が共有できるようになってるんですね。おすすめ情報というのは、飲食店とかいろんなものがこれから追加されていくと思うんですが、こういうのを利用するですよ。「この前、宇和島走りました。宇和島走った後はパールエステ行って、ほら、こんなにきれいになった」とかね、写真付きで載せちゃうんですよ。こういうのを絶対活用すべきだと思いますね。ちなみに、出張行った時も、じっとしてないで、どこかのお店行くと思わぬ出会いがあります。宇和島、遊子のあたり行こうか。これ「遊子の段々畑から四万十源流めぐり」というコースガイドがあつて、地図があつて、高低差があるんですね。ここに動画が入っています。これ遊子から宇和島の動画、ちゃんと撮ってますから、これを全国の人が見れるわけですね。今言った26コースの情報がこういう形で「愛媛マルゴト自転車道」で出てきますので、こういうのも活用したらいいと思いますね。一応、参考までに。

8. 宇和島バラ展への協力について

南予いやし博の継続事業、うわじまバラ展も3年目となり、先月南楽園で開催した時は、2日間で2,200人の入場者があった。本年は、会員が自宅で育てたバラや、草花とのアレンジ作品200点、切り花、販売用フラワーアレンジメント、地元の小原流いけばなコーナー、バラづくり相談など、多くの皆さんに花の色や形、香りなどを楽しんでいただいた。四国西南バラ会は平成22年に発足し、平成24年の南予いやし博時にはまだ日が浅く不安はあったが、会員が相談しながら一歩足を踏み出した。関係機関が私たちのこうした活動を側面からサポートしていただいたことを、大変ありがたく感じている。また、県や各自治体の関係課に後援申請に行く際、窓口の対応がよく、スムーズに対応していただいております、「いやし博以降もつながっているな」と感じる。また、県や市町村長が見学にいらっしゃることは、私ども大変励みになっている。四国西南バラ会会員は、高知県宿毛市から西予市まで広範囲に及んでおり、今後も県境を越えた交流とバラづくりの普及、観光振興に努めていきたい。松山市の萬翠荘のバラ展は歴史も古く有名であるが、南予の宇和島バラ展も今後ますます発展させていただくよう、知事の御協力をお願いしたい。知事が自転車のことを一生懸命話されていたが、是非、バラもプログラムに入れていただき、南予を自転車で走る時は、会員の庭も是非御覧いただきたい。

【知事】

僕は萬翠荘のバラ園は、市長時代に毎年のように行っていました。最近なかなか公務が重なって行けてないんですけども、南レクを御活用いただきまして、ありがとうございます。南レクも、愛媛県の施設として30年近くたつんですけど、本当に素晴らしい施設なんです。今までは高速道路が通ってなかったこともあって、当初、開園した時はわっと来たんですけど、その後、いろんな面で苦戦を強いられてきたんですが、高速道路通ったからには、これからは、とにかく入場者を増やそうと、担当部局と南レク関係者にはいつも言っています。今、いろんな企画展を開催するようになりました。もうすぐ始まるのが風鈴展で、今度47都道府県からの「これは」という風鈴、中国やインドなど海外からの風鈴も展示されるそうなんです。人気投票で投票に参加した人には何かプレゼントがあるとか、そんなものを組み合わせて集客しようという試みもされているそうです。花というのは、どこでやってもある程度人は見てみたいという気持ちになる素材なので、南楽園の魅力、場所的な魅力と、他の組み合わせをしてもいいと思うんですね、バラ展と南予の食とか。さっきのパールエステでもそうですし、横の連携ってすごく大事だと思うので、横の連携で魅力を、付加価値を上げていくということをもっと考えられたら面白いかなという感じがいたしました。バラの場合は、人気投票なんかあんまりやっちゃいけないのかな。なんか楽しそう、面白そうという要素があると、より一層増えていくことになるので。そのためには自分も楽しそうだと思えないと、なかなかアイデアって生まれてこないと思うんですけど、是非、そんなことも考えて、イベントの魅力を今後ともどんどん膨らませていってほしいと思います。よろしくお祈りします。

9. スマの市場での位置付け及び愛育フィッシュを使った郷土料理のPRについて

冒頭で知事からお話があったが、養殖業としてのスマのイメージが湧かない。実際、幼魚としてスマが市場に出た場合のマーケットはどういった位置付けなのか。クエやマハタみたいな高級魚なのか、それとも安い価格訴求の魚なのか、作る側、生産者側の勝算はあるのか、お聞かせ願いたい。また、宇和島鯛めしという、白ごはんの上に刺身をのせて、たれをかけて食べる料理があるが、これが5年ほど前、農水省選定の郷土料理100選のランキングで、全国7位に選ばれた。ちなみに、1位は山形県のイモ煮であるが、こういった愛育フィッシュを使った料理をもっと是非全国に発信していただきたい。県魚のPRとともに、料理のPRにも力を

入れていただき、魚食普及等につなげてほしい。

【知事】

スマは御存知のとおり魚なんですけど、マグロなんかの漁で、時折入り込んで、ちょっと小さ目の魚で、天然のものもほとんど市場に出てなかったと思うんですね。多分捕られた漁業関係者が自分たちで食べてた。おいしいというのは誰もが分かっていたんだけど、なんせ数が少なかったということもあるので、市場に出すというような魚種としては認知されていなかったのかなと思うんです。今回、どこもやっていなかった技術の研究を進めてるところで、さっきもちょっと水産研究センターに行ってきたんですが、みんなものすごい気合い入ってます。どの段階でどういう餌をやれば成長につながるのか、餌のタイミングを間違えると、共食いしちゃったりするので、そういう研究も今どんどんやっています。それから、どうやったら太らせるかということもやってまして、2年間で4kgを目指しています。これが3年、4年になったら、その分コストがかかりますから、できるだけ短期間で太らせるという研究もやっています。それから、水温の関係でいうと、今の段階ではやっぱり愛南町あたりかなという感じなんですけども、ある程度の値段を取る魚種として位置付けたいと思っています。というのは、食べられたことありますか、養殖のスマ、ないでしょう。まだ完成品じゃないですけど、量的にも少ないですけど、本当にマグロのトロみたいですよ。トロ成分が多い、カツオっぽいところもあって、そんな感じですね。カツオとマグロの真ん中で、限りなくトロに近いイメージです。特にアジアなんかは、トロ成分というのはものすごい人気があるんですが、去年シンガポールに売り込みに行った時に、皆さん食べ付きはよかったんです。マグロ持っていったんですけど。でも、30kg、40kgになると、仕入れる側からすると大きすぎるといところがあって、3〜4kgになるとがぜん食べ付いてくるんですよ。海外向けにも一つの戦略商品として成り立っていくのかなと。トロ成分に対する人気があるのと、3〜4kgというサイズの取り扱いやすさがあるので、海外向けにも戦略商品になると思います。国内向けも、これから何で愛育フィッシュが今踏ん張りどころかという、全国的、全世界的な漁獲制限の流れと、回遊の安全性の問題というのは、年々クローズアップされていきますので、これからは、間違いなく愛育フィッシュ養殖への関心需要というのは高まってくると思います。もちろん、魚食の推進を並行してやっていかないといけないんですけども、こうした状況から、今が踏ん張りどころだと思います。愛媛らしいところをどこに求めるのか、ちゃんとターゲット絞っていく必要があるんですね。その中の一つとしてスマが出てきていることです。

名前はすごい大事なんです。1回聞いただけで「うんっ、あっ」となるような名前がついた場合、あっという間に広がりますので、一番いい例がさっき言った「愛媛甘とろ豚」という豚肉ですね。名前からして、きつこうに違いないという期待どおりの味が待ってますので、やっぱり売りやすいんですね。今、イチゴのほうも開発中で、今のあまおとめの糖度を持って、さらにおいしくしたものが出来上がったんです。名前をどうしようかということで、県庁職員にいろんな名前を出してもらって投票にかけたら、「媛ルージュ」という名前がいいということになったんですよ。ところが、専門家に意見を聞いたら、「駄目だ」というんですよ。専門家が三つぐらいぼんぼんぼんを出してくれて、「あっ、なるほど」と思ったんですけど、結局何になったかという、まだ正式に決まってないですよ、商標登録の確認なんかこれからですから、その人が言ったのは、「紅い雫（しずく）」。紅と書いて、「紅い雫」。まさにイチゴって紅い雫なんです。これはいいや」と言ったら、「媛ルージュ」は今の段階では却下されて、そういうものだと思うんですね。スマというのも実は名前ってすごく重要だと思っています。

それからもう一つ、水産研究センターで職員に聞いたら、既に5億円の市場になったみかんフィッシュです。今、餌の中に皮を混ぜてるんですけども、どうしても残渣が出るという問題と、

コストの問題があるので、今何をやってるかというのと、ミカンの皮を絞って、濃縮させて、油を抜いた液体型の餌を研究してるんです。これをやると、コスト的には6～7%ダウンできるというのが分かってきて、むしろ「丸ごと餌をやるよりは、さらに染み込みが早いというのが見えてきてます」と言っていました。みかんフィッシュは、今はブリとハマチが中心なんですけど、この液状のものを使うと「タイにも持っていけます」と言っていましたので、このあたりで愛媛らしい愛育フィッシュの付加価値をどんどん高めていけたらなと思っております。

《補足》〔農林水産部〕

スマを愛育フィッシュの新たな高級魚として普及させるため、養殖技術開発と並行して、知名度の向上やブランド化、販路開拓などの流通販売対策を検討・実施することとしており、27年度は、次の事業の実施を検討しています。

〔検討内容〕

- ネーミングやロゴマークなどを含めた具体的な販売戦略の検討
- 知名度向上やブランド化のためのプロモーションの実施
- 養殖実証試験の実施

10. 愛南町における医師確保及びヘリコプターでの救急搬送について

愛南町は鉄道も高速道路もない、県下でも一番南の端にある町である。知事が先程言った田舎を逆手に取って売り込んでいこうというのは大いに賛成であるが、医療体制は松山と同等の体制が欲しいというのが本心である。現在県立南宇和病院は、医師定数が22名であるが、実数の勤務医は8名しかいない。特に麻酔科医が欠員になっていて、緊急手術もできないので、1時間かけて宇和島まで救急車で搬送している。是非、知事の力で医師の確保をお願いしたい。

また、高速道路ができるまで、あと10年ぐらいかかるが、少なくとも今から10年間、医師が足りないという状態でずっとやっていくと、松山あたりから遊びに来てもらっても、いざという時には満足に医者にもかかれぬ。そこで、県の防災ヘリがドクターヘリで動いているが、愛南町にドクターヘリのドクターがいないので、救急ヘリで、消防署の救急隊員が同乗していくという形を取れば、かなり経費も節約できる。1機常駐で配属してもらえれば、愛南から松山まで15分か20分で飛べるので、アイデアとして検討してほしい。10年も待って医師が来ないという体制ではプラスにはならないので、是非、実現をお願いしたい。経費が年間1億ぐらいはかかるため、難しいとは分かっているが、よろしくをお願いしたい。

【知事】

愛南町で町長さんと住民集会をした時にも、この話が出ましたので、その時にどんな話をしたかというのと、重複になってしまうんですが、まず、何でこのローカルにおける医師不足が発生したのかは意外と知られていないんですね。これ、実は最近のことです。平成16年からなんです。その時に、国全体の制度が変わりました。研修医制度というのが大幅に変わってしまったんです。それまでは、全国まんべんなく研修医の方々がいろんな地域に出向いて勉強して、正式にドクターになっていくというルールだったんですが、なぜかその時に、医師会からの要望だったと思うんですけども、「どこの場所で研修するかというのは、学生の自由選択、自由裁量に委ねてほしい」と、これが通っちゃったんですよ。その結果、何が起こったかというのと、研修医の先生がみんな大都市に集中しちゃった、地方には誰も行かなくなっちゃったんですね。これが実は全国、全ての地方都市において、医師が不足する一番の根っこなんです。これ間違いないですよ。ところが役所というのは、一度やったことが過ちであったということは、口が裂けても言わないわけですよ。僕らも市長時代に何度となく厚生労働省に、「そもそもの原因はこの研修医

制度にあるじゃないか」と、「それまではそんな問題起こってなかったんだ」と、「だから、これについてもう一度見直すべきだ」という声を上げ続けてます。でも、これが動かないんですね。それは間違いとか、そういうことにはつながってない、直接の原因、因果関係はないということと、それから、医師会からあるのかもしれないですけども、これはまだ諦めてないです。事あるごとに知事会でも市長会でも研修医制度を見直して、地方にまた来るような体制を速やかに整えるべきだというのは、毎年上がってますので、これはさらに突き上げをしていきたいなと思ってます。

その一方で、別に声を上げるだけで手をこまねいてるわけではなくて、これは僕の前の加戸前知事の時代なんですけども、地元には愛大医学部がありますので、新たな奨学金制度を立ち上げました。この奨学金制度を受ける条件として、卒業後、地域に一定期間残るということを義務付ける奨学金制度ができてます。今、順次どんどん増えてます。もう少したつと、これから国家試験を受けるという段階に入ってきますので、正式に出てくるのが平成30年、その子たちがようやく地方の勤務として活躍していただけるような体制が出てきますので、そこまでが大変なんですよ。これもまたひどい話で、ある地域集會に厚生労働省が来た時、住民の皆さんから医師不足の話が出たわけです。そしたら、「いやいや、行政も頑張ってるんです」と。自分の研修医制度の問題には触れないで、「地元で勤務できるような奨学金制度を設けたり」と言ったわけです。でも、これ、設けたのは地方なんです。国はびた一文出してないです。僕は手を挙げて、「ちょっと待ってください」と、「今の発言は撤回してほしい」と、なぜならば「あなたたちは1円も出してないでしょう」と、「これは、やむなく地方で立ち上げた制度で、それをあたかも医師不足に対応するために、国がやったようなふりをするのはやめていただきたい」って。そういう話をしたこともあるんですけども、事態はそうなってます。愛南町だけじゃなくて、県下、日本全国、医師不足の問題というのは、みんな同じ悩み抱えています。正直言って、来てくれないんです。その中でも「何とかありませんか」というのは、繰り返しやっています。ただ、いつまでもというわけじゃなくて、平成30年になったら、今、言ったような奨学金制度が利いてきますので、本当にここ辛抱のしどころなので、こういった実態があるということだけは、知っておいていただきたいなと思います。

それから、ドクターヘリというのは、なかなか難しい運用でして、かつて松山市長の時に島しょ部を抱えてましたから、どうしても島しょ部というのはヘリコプターでも使わないとすぐに送れないということもあって、いろんな計算もしてみました。でも、松山市の財政状況をもってしても、これは無理でした。そこで、当時、松山市が何やったかという、消防車搭載型の高速艇を建造して、それを配備することによって、多少なりともスピード感のある搬送体制を組むということで、何とか今があるんですけども、海外に行くと、ドクターヘリって結構小さな町でもやれてるんですね。松山市の姉妹都市にドイツにフライブルグという町があるんですが、20万ぐらいの人口なんですけど、ドクターヘリ、フル回転してるんですね。「何でこんなことができるんですか」と聞いたら、これはお国柄の違い、向こうはキリスト教社会で、宗教団体が各地域において、社会貢献としてドクターヘリの運用にドーンとお金を出してるんですね。そういうのはちょっと日本ではね、本当はあったらいいとは思いますが、仕組みが違うんだなということを感じました。ただ、ドクターヘリというのは、全体のことを考えても、救急搬送の時の一つのテーマでもあって、今、費用やニーズの問題で、防災ヘリの共同運航という形にしていますけども、どういう状況になってくかというのは、時間をいただきたいと思っています。

《補足》〔保健福祉部〕

他県の先進事例等を踏まえ、愛媛県らしいドクターヘリシステムの構築について、検討していくこととしています。

1 1. 農業関連補助の地域による違いについて

愛媛の中央のほうでは、今、紅まどんなを前面に押ししていると思うが、宇和島市のほうではブラッドオレンジを押ししている。視察に行った時、施設の設置や、苗木1本1本の補助の差がだいぶあるという話を聞いた。僕らのような若い者がそういった人気のあるものを植えたいとなった時、もう少し市、県、国などから、「補助があつたらな」という話があつたので、どのような状況になっているのかお伺いしたい。

【知事】

改植については、やっぱり戦略商品については、多少厚めの誘導的な補助制度があります。国もありますし、県もありますし、宇和島市も多分あると思うんですね。ただ、市町村の補助というのは、市ごとにどういう取り組みにしているか、ちょっと僕もつかんでないので分からないんですけど、例えば、松山市の場合は、今言った紅まどんな等々の戦略商品に植え替える時は、農業活性化事業というのを起こして、市単独の補助制度を作っていたことがあります。それは市町村ごとに違うと思うので、ちょっと分からないですね。紅まどんなは、確かに値はいいんですけども、作るの難しいですね。恐らく光センサーにかけて、見てくれも含めて商品化できるのが2~3割じゃないかな。あとは、はねられていきますね。それが故に市場評価は高いです。なぜならば、紅まどんなという称号というのは、一定の規格をきちっとクリアしてるから安心だという購買側の信頼が生まれてるので。

ちなみに、紅まどんなって一体東京の末端で幾らぐらいで売られてるか、結構、生産してる人知らないんですよ。去年は、東京の銀座の三越というデパートのフルーツコーナーで、1個幾らで売られてたと思います、1個ですよ、2,000円。贈答品は注文が追い付かない。ただし、紅まどんなの場合は、あくまでも12月単独の出荷しかできないので、量的には限られてるけれども、何でこれにこだわったかという、こういう戦略商品が1個でもあると、愛媛県産というのは質が高いというイメージにつながるんですよ。ここ2年の間は、例えば東京の大田市場あたりでも、他県産と比べると温州ミカンなんかでも、愛媛産というのは1割ぐらい高くなってはるはずですよ。それは、今言ったように、イメージ、愛媛産というものに対する信頼がこういったものにつながってるんだらうと思います。実際おいしいですから。

ただ問題なのは、例えば、「この紅まどんなの木を使ってるんだから、別にセンサー通らなくても、紅まどんなという名前で売らせてくれ」という話もあるわけですよ。でも、これを認めると、市場の評価はがた落ちして、あつという間に値崩れが起こるので、ここは踏ん張りどころだと思います。ここはすごい難しいです。その気持ちは分かるけども、それで値崩れを起こしたら、元も子もなくなります。紅まどんなは、農協が商標を持ってるので、そういうふうになってるんですね。でも、何とは言わないけど、農協が持っていない商品というのはあるんです。こういうものは、別に光センサー通ってなくても、この木で作ったからこの名前で出しちゃえと、そしたら、ばらつきがものすごい出てくるんです。僕らが売り込み行っても、「あれ、当りはおいしいけど、差があり過ぎてちょっと扱えないよ」と、こういう声になっちゃうんですね。この辺は難しいなと思ってます。長い目で見たら、いいものを提供し、信頼を得ていくというのが大事だと思ってますので、そのためにも、いいもの作る時には、制度なんかも調べて、問い合わせしてくれたら、すぐ県のほうでも調べられますので、活用してもらえたらなと思います。

(南予地方局産業経済部産地育成室長)

先ほど申し上げました紅まどんなの補助等につきましては、果樹菜園事業や園地在園事業は、大体3分の1補助です。それ以外にも認定農業者の事業の認定を受けると、3分の1程度の補助金が出ます。松山が非常に高かったということは、先ほど説明がありましたとおり、松山市のブランドに認定されていますので、その上に多分6分の1の補助が出まして、あわせて2分の1

の補助になるというような形になります。市や町が上乗せをどうするかというのは、それぞれの判断となります。個別の相談は、産地育成室にでも来ていただければ、対応できますので、よろしくお願いします。

12. 災害時における援助及び北灘湾に流れる川草について

愛媛には原発もあり、地震も来るということで、何かあったら、海のもの、山のもの、愛媛のもの自体が売れなくなると思う。地震が来た場合の目に見えた対策、もし、何かあった時に対応できるような体制は整っているのか。赤潮、台風など、いろんな災害がある中で、もし甚大な被害があった時、市として県として、いろいろ手助けしてもらえるところが少しでもあればと思う。僕たちは北灘湾というところで魚や真珠の養殖をしているが、上流にダムがあり、梅雨や台風、また、すごい雨が降った時、川にあるアシや草といったものが流れてきて、集まった時には湾の海を歩けるんじゃないかというぐらい汚れる。それを地元の海に携わる人たちが清掃するが、微々たるものでしかない。業界からも声を上げて、市か県に言ってもらっているようだが、毎年そうなるのが分かっているんだから、川の草を刈る時に、そのまま置いておくのではなく、上で処理してもらおうとか何か方法があるのでは。多くの量の魚と真珠を扱っている場所に、ごみを流すような状態が毎年同じように繰り返されている。自分たちの海は自分たちで守らないといけないという精神でいるが、人の力というものは知れているので、災害があった時、何か少しでも補助や助け舟があったいいと思う。

【知事】

非常に範囲の広い話なので、具体的に答えられるかどうか分かりませんが、まず、自然を相手にした問題が発生した時、何らかの対策は必ず打つんですね。制度で補償されてる部分もありますよね。例えば共済制度であるとか、保険であるとか。例えば漁業の場合、共済なんか非常に条件のハードルが高いですよ、全体が加入、同意しないと適用しないとか。これはもっと入りやすく条件を緩和すべきじゃないかということ、国に対して要望事項の中にいつも入れてます。まだ、アクションが起こってないですけど。

何か起こった時のいい例が、一昨年の赤潮です。赤潮発生時に、例えば、魚の処理については県の単独補助を出したり、それから、厳しい時を乗り越えるために、借入金の利子補給をして、無利子制度を立ち上げるとか。今、一番、毎日頭を悩ませてるのがキウイフルーツです。キウイも今、そういった形で何をやってるかということ、全伐採にかかる費用の補助、それから、収入が途絶えた時の利子補給制度。これ今議会で出します。それから、拡大させないための雨よけやネットへの補助対策。それから、伐採は人手が要りますから、これは県庁職員が連休から土日全部返上して、毎日刈り取り作業に入っています。そういったものは、身近な県で目いっぱいやれることはやれます。ただ、あとの制度の問題は国にかかってくるので、この辺はさっき言ったような制度そのものの問題点が業界から常に上がってきますから、条件の緩和や改善などを国に対して言っていくというのが、県の役割になってます。

それから、防災・減災については、大災害が起こった時に、全てカバーできる体制が整っているところは、全国どこにもないですね。ある一定のレベルまでは抑えられても、例えば、東日本大震災クラスに全く問題なく対応できる地域は、全国にはどこにも存在してないと、これは間違いのないですね。今、何をやってるかということ、まずは人の命を優先させる、これに尽きるということで、この2年間、県の単独事業を立ち上げました。それは緊急の避難路を宇和海一体に全部整備する。しかも時間はあまりない、2年で片付けようということで、愛南町、宇和島市、西予市、八幡浜市、伊方町の宇和海沿岸部に全部声をかけまして、一気に352箇所の整備が今年の3月に完了しました。これは、何か起こって避難勧告が出た時、ともかくそこを使って上へ上が

ってくれと。建物等々は後で修繕はできますけど、何よりも命。命は取り返しがつかないので、そこが第一優先順位。次の順位というのは、その上に行った時に最低限の生活ができること、例えば、避難所の資機材ですね。これをこの4月から整備していく段階に入ってます。大きな津波等々の対策になると、堤防をどうするかとかの段階に入っていきます。これは巨額の投資と長い年月が必要になってきますので、今、国の事業として進めているという段階です。それから、さっき愛南町の話が出ましたけども、特に愛南町が深刻なのは、国道が1本しかないですから、何かあったら全て孤立しちゃうんですね。命の道としての高速道路というものの重要性を強気に突き上げてる最中で、ともかく1日でも、1カ月でも早く、8の字ネットワーク、高速道路をつなげてくれと。宿毛とのラインも高知と愛媛の間は合意し、「このルートで検証してくれ」という声を先月上げたところなので、ともかく1日でも早く完成できるように、これからも全力を尽くしていきたいと思ってます。

それから、原発なんですけども、原発というのは「絶対安全か」と言ったら、絶対安全なものではないと、ただし一方で、福島と同じことが伊方で起こるかと言ったら、これは起こらないです。なぜかという、福島で一番問題になったのは、歴史的に15m級の津波が幾度となく押し寄せた記録が残っているところに、海拔6mに原発をつくったんですよ。歴史的に十数mの津波が何回も来てるんですね。そんなところに6mの高さで原発つくったわけですよ。しかも、今回一番問題になった電源が全てシャットアウトされたんですね。電源が切れた時というのは、非常用のディーゼル発電機で動かすか、電源車で動かすかすれば、とりあえず水が回せるんですね。水が回せるというのは、冷やせるんですよ。冷やせたら、暴走はしないんですね。この水が流せなくなった時に、自然発熱でどんどん膨張しますから、今回、全電源が喪失して水が掛けられなくなり、抑えが利かなくなって暴走したんですね。その原因は、僕も後で知ったんですけど、非常用電源室が地下にあったんですよ。10mの波が来たら、6mのところだから丸かぶり、かつ地下に置いてあった非常用電源室も水の中に埋まる、使えなくなるに決まっていますよね。それが実は福島で起こったことでした。伊方はどうなってるかという、佐田岬半島の内海側にあるので、最大の津波が来ても4m、4.5mなんです。なぜかという、愛南とか、宇和島には高い津波が来てしまうんだけど、そこでエネルギーが使われて、残ったエネルギーが内海側に回っていきますから。あの場所は4.5mぐらいがマックスになると思います。伊方の発電所が何mのところにあるかと言ったら、10mのところで作られてるんですね。だから、津波は来ないんです。ただし、揺れのリスクは一緒なんです。揺れのリスクは福島と同じように伊方もあるので、今、伊方で我々がしつこいぐらい言ってるのは、「津波の心配してないけど、揺れ対策は同じじゃないか」と。独自の政策も含めて、国も今、何か基準地震動の問題をやっていますけども、揺れに関しては、最大限の安全対策をやらないと認められないというのが基本スタンスです。今それがまだ見えていませんが、やる方向はこれから出てきますから、揺れ対策をしっかりやる。それから、津波の心配はないけれども、電源が全ての生命線なので、新たに非常用電源車が配備されました。それから、国は言ってなかったんですけども、「もう1本、電気ルートを作ってくれ」ということで、伊方の上に亀浦という変電所があるんですが、去年この亀浦の変電所から伊方の1号機、2号機、3号機に、新たな電線を敷く工事を実施してもらって、今、さらにプラスアルファの電源のルートを確立しています。そんな気付いたところを、どんどんやってくのが大事かなと思ってます。

(南予地方局建設部長)

ダムができた関係で、アシが流れてくるというお話がありましたが、ダムは山財ダムだろうと思いますけど、ダムの目的は、大雨が降った時に、なるべく下流に大水が出ないようにという目的でつくられたということをございます。ダムがなかったら、すごい量の水が流れてきたかもしれないけど、それをある程度遅く流すといいますか、時間をちょっと遅く流して、ゆっくり出して、水の量を減らすという目的でつくられております。もちろん飲み水にも使うようにするし、

畑、ミカン畑のかんがいにも使うと、そういう目的で造られたものなので、逆に言えば、多少ごみが出ないほうに役立ってるかなと思っているところです。それと、岩松川のアシということになると思うんですけど、確かにアシがたくさん生えている状況は、我々も河川管理者として確認しております。河川の大水が出た時に、アシが邪魔になって洪水が起こるといようなことであれば、それは取っていかねばならないと思っているところですけど、我々としては、例えば、土砂がたまるとか、川の中に大きな木が生えて水が流れてきた時に、それでもものが詰まるとか、そういう時には撤去するというのを考えているわけですけど、なかなかそういう状況にはなっていないということもあるということをお理解願えたらと思います。それと、アシが生えているということは、多少川に土がたまっているのかなということも因果関係にあらうと思っておりますので、今年度、宇和島市津島支所のあたりから山財ダムの上流に向かって約6km ぐらいの間を調査しまして、土砂がたくさんたまっているようであれば、土砂を取ると。その土砂を取ることによって、今、生えているアシも結果的には多少取り除けるかなと思っております、今年度、そういう調査をしているという状況でございます。結果については、また御報告できたらと思っておりますので、御理解のほど、よろしくお願いいたします。

1 3. 林業生産の安定化及び林業機械の技術革新について

林業については、川上、川中、川下で、下と中はかなり技術革新が進んでいて心配はしてないが、一番問題になっているのは川上の生産のところ、生産が非常に難しいと思っている。林業は生産サイクルがすごく長く、日本は短くて60年サイクル、海外では100年単位であり、再生産はほとんど先進国しかできていない。生産サイクルが長いと経営が難しく、キャッシュフローを切らさないようにしないといけないが、それをやっていくには、組織改革が必要で、これは個人単位でできることではないので、県としても支援していただきたい。また、林業の生産は技術革新が進んでいない。道づくりでも、愛媛県の林道を見ると、傷めるつくり方をしている。先進的と言われてるところを見ても、道はつくっているが、機械的な技術革新はあまりできておらず、道をつくる時は土木の機械を使っている。農業は農業の機械を使っているが、ゼロベースから林業の機械をつくっているところは、日本では多分ないと思う。車を通すだけではなく、材を出すという観点での一番効率的な道のつくり方というのは、多分今のやり方ではないと思う。現役の森林組合の方や工務店の方は年齢が高く、発想がループしているのではないかと。道をつくる補助金を出すよりも、革新的な林業機械を開発することに予算を組んだほうがいいのではないかと考えている。

【知事】

これは組織の問題なんですけども、農協にしろ林業の組合にしろ、体質的にはやっぱり歴史があるが故に、若干古いところも持ってると思います。また、嫌われ役をやらないといけないんですけども、例えば、県内の農協組合長全員が集まった時に、去年講演をさせてもらったんですけども、海外の事業、国内マーケットの縮小、そういう中で、このままだと絶対に農協の存在価値は低下する。でも、一方でやっぱり必要なんですよね。コミュニティを束ねていく、全体を指導していくということは大事だから、生き残るために発想を変えてほしいと。これから、それに気付いて前向きになる農協と、そこに気付かないで今までどおり、去年と同じことやっていけばいいという農協の2極化現象が起こるでしょうと。ここにいらっしゃる組合長さんは前者であってほしいなと、そんな話バーンとやって、どう受け止められたか分からないですけど。少なくとも、その段階までは、農協に「海外に売りに行きましょう」と言った時は、全く反応がなかったです。でも、この1年で、マレーシアへ行き、台湾に行き、「ともかく一緒に行きましょうや」と言って、実は売れるわけですよ。今、台湾は2,000万ぐらい出始めて、今度新たに「もう一つでかい

ところをやる」と言ってます。「売りたい」と向こうも言ってるんですね。行ったら売れる、マレーシアも食い付いてきましたから、農協の人もそれ見て、「いや、売れるんですね」というのが分かったんですね。この方面に人材を投入しましょうと動き始めてるので、やっぱり変わるきっかけを作ってあげるって大事だと思うんですね。

林業も同じことがありました。これはおとしだったんですけども、そもそも、川上の人たちの言っているところと、川下の人たちの言っているところが、同じ業界で一線につながっているはずなのに、ばらばらじゃないかと。ここは一つ討論会みたいなフリーディスカッションの会をやりたいと、1年前に川上から川下に至る関係者みんな集めて、本当に原稿全くなしと、フリーなディスカッションを3時間ぐらいやったんですね。そしたら、いろんな意見出てきましたよ。これが面白くて、「何だ、川上ではそういうふうを受け止めてたのか」と、「いや、川下はそういう考えなのか」というような意見も飛び交うようになって、その場で結論が出たわけではなかったんですけど、ある程度の方向性が見えたんです。それを受けて、県庁職員がその時の議論をまとめて打ち出したのが、さっき言った造林対策も含めた主伐であるとか、他も含めた林業躍進プロジェクトなんです。今、それが動き始めたところで、この前の岡山の先駆的なものも、林業関係者みんな一緒に来てくれました。ともかくチーム愛媛でやろうじゃないかという動きが始まっていますので、この変化というのは、必ず結果に結び付いていくんじゃないかと僕は期待しています。

それから、林業の伐採機具の話なんですけども、残念ながら日本の林業関係の機械というのは弱いんです。木材の市場なんか行っても、ほとんど北欧の機械が入ってます。例えば、ハンドルを操作しながら、ちょっとやねこいところでもバサッと切って、枝打ちまで全部できるような先端技術を持ったユンボとか、実はこれ久万の林業研究センターで研究しています。どういう機械であれば、実際の日本の林業の現場で役立てられるかというのは、まさに、今おっしゃった仕事、開発でして、もし機会があったら、久万の林業研究センター行ってみていただいたら、こんなことをやってるんだというのが見られると思います。その横にさっき言った林業大学院、林業コースもありますので、是非、1回行ってみたいと思います。

(参加者)

そこら辺の機械は実を言うと知ってるんですけども、向こうの機械は大体平らなんです、逆に沼地にあるような感じで、水はけが重要なんですけども、日本は急峻じゃないですか。その急峻なところから、どうやって低コストで出すか。要は材を出す時に、木材の価格を下げないと、農業なんか、農産物は価格が下がってきて、養鶏なんてもっとですよ。林業は、価格が市場的には下がって、でも、コスト的には上がってるから成り立たないところがある。この出す機械というのが、北欧は当然そういう地形があるので、日本の場合は、高温多湿で雨がすごく多いので、この雨をどうするかという問題が、林業で搬出はすごく重要だと思うんですけども、そこら辺っていうのは、本当に実を言うとゼロベースで考えないと、北欧ベースとかで考えると、難しいんじゃないかなと思うんですけど。

【知事】

それはちょっと勘違いで、まさに今のユンボは日本製なんです。日本製のユンボに、その北欧の伐採の先端、これは向こうのほうが圧倒的に強いんですね。この日本のユンボ、日本の地形を今まで道路をつくるとかで開拓した日本製の小型サイズのユンボに、それを組み合わせたら、日本の林業に適した機械ができるんじゃないかという研究をやっているんです。そういうことなんで、ユンボも全部丸ごと北欧というわけではないんですね。

(参加者)

それが、その日本ベースの土木機械の先端に付いてるんですよ。そうするとキャタピラなんかも、車を出すことを前提とした道づくりにどうしてもなってしまうと、それが山を傷めるという状況です。僕としては、山が再生してくると農業とか漁業のほうも、再生できるんじゃないか

と思っています。コミュニティという意味でも、昔、山に入ったところのコミュニティというのは賑わいがあったんですね。山を放した段階でコミュニティもどんどん縮小して、町のほうに近づいています。松野町なんか特にそうだと思うんですけども、地域再生のためには、林業はポイントじゃないかなと思っていますので、是非、よろしくお願いいたします。

【知事】

人が戻ってくるには、やっぱりもうかる業界という位置付けが見えてこない、なかなか難しいんですけども、個々の地域特性プラス業界全体の仕組みという仕組み制度、ビジネスモデルを作っていかなきゃいけないと思うので、それには、やっぱり業界組合の横の連携というのも大事だと思いますから、両方の面が必要だと思いますね。道の問題も含めて、理想論ではあるんですけども、やっぱりコストを考えないといけないので、じゃ、今まである日本の機械と。くどいようなんですけども、一番こちらの部分では日本は残念ながらニーズがないので、先端の部分なんか技術が遅れていますから、それを組み合わせたらどうなるんだろうかという中で、最低のコストでできることを追及していくというのが、研究所の役割なのかなと思っています。

14. 高い技術のPR支援及び地域づくり功労者の表彰について

うちはクリーニング業で、宣伝するにもなかなか難しいところがあり、お客さんの層も50代、60代が中心。スーパーなどに入っている、県外から大きなスーパーが来たら地元のスーパーがつぶされてしまう。苦しい時期に目を付けたのが、インターネットの世界で、独自で頑張っ、今では多分県内で一番県外から衣類を集めるクリーニング店になった。ハウスクリーニングもやっているが、愛媛県産というところで、ものとかじゃなくても、技術というところでPRできるような援助があればいいと思う。本当にすごい技術を持った方が、南予をはじめ、いろんな地域にたくさんいるので、そういったところも応援していただきたい。

また、地域づくり団体が結構あり、そこで本当に頑張っている方がいらっしゃるんで、物品がなくても、表彰制度など、賞状一つもらうだけで、その団体のメンバーのモチベーションがすごく上がり、やっていることにも自信が付くので、人にフォーカスを当てることも今後お願いしたい。

【知事】

愛媛県というのは、技術は本当に大したものだなと。中小企業の高い技術力というのは、ものすごくあるんですね。ただ、これも縦割り、それから業種、それから系列、全部縦なんです。外に出てこないんですね。そこで考えたのが「スゴ技」データベースなんです。これはエントリー方式で、自分の会社の技、ここにきらりと光るものありというのを県に応募してもらうんですね。専門の審査員の先生方がそれを審査しまして、ここだけのもの、日本一のものというのを全部データベースにしています。これ何をやるかという、僕が持って営業マンやってるんですよ。最初は県庁に営業という感覚があんまりなかったんで、僕はもともと商社マンでしたから、民間の営業とはどういうものなのかというレクチャーして、ともかくまず最初の勝負は交渉なので、プレゼンテーションだと。やり方をまず見せますから一緒に来てくれと、最初の相手として、やっぱり手ごわい相手がいいなと思ったので、元いた商社の世界で、三菱商事、三井物産、伊藤忠商事、住友商事、丸紅、その本社ビルに乗り込んで、ぎゃんぎゃんやったわけですよ。商談会ぼんぼんやっていくわけです。技術を持った中小企業は、技術はあるんだけど営業力がないんです。愛媛県がその橋渡しになって、その会社とのビジネスマッチングの機会を作るんですね。こういう中小企業が普段本社に行っても大体門前払いですよ、名刺を受け取って終わり。ところが、愛媛県がコーディネートしたビジネス商談会になると、担当役員まで全部出てくるんです。「ここから先は自分でやってください」と、「チャンスを作ります」と、「我々、あくまでも補助エンジ

ンで、メインエンジンはそれぞれの会社ですよ」と、「だから、もうここはエール送るしかないんで、このチャンスものにしてください」って、ビジネスが生まれていくんですね。これが第一弾です。こういう技の使い方があります。第二弾は、今年作ったんですけど、「すご味」データベース、これは愛媛県の農林水産物や加工食品。これも「すご味」データベースというのがあります。来月もう1個出ます。今度は「すごモノ」データベース。これは、これこそ営業力がなない伝統工芸品です。例えば、水引細工であるとか、菊間瓦であるとか、桜井漆器であるとか、大きなところでは今治タオル、真珠、砥部焼、野村のシルク、大洲の和紙とか、いっぱいあるんですよ。これも職人はいても、売る力がないんですよ。今度は「すごモノ」データベースで、これも売り歩きます。

僕一人ではさすがに限界があるので、そこで愛媛県庁に営業部というのを作ったんです。今、営業部隊が三十何人いるんですけど、やり方は厳しいです。営業であるからには数字を求めると。訪問件数、商談会の開催件数、それから新規の成約件数、四半期ごとに全部報告義務を課してますので、数字が上がってくるんですね。さすがに初年度は右も左も分からず突っ込んでいったので、初年度の新規のビジネスは8億円でした。2年目に入って26億まで延びています。さらに今年度の目標は「一気にいくぞ」と、50億にしてるんですけど、今、悲鳴が上がってるはずなんです、みんな一生懸命、頑張ってくれています。

《補足》〔企画振興部〕

地域づくり団体に対する表彰制度としては、以下のようなものがあり、例年、市町を通じて募集を行っているところです。

【表彰制度（所管省庁・募集時期）〔近年の本県受賞実績〕】

- 地域づくり総務大臣表彰（総務省・2月頃）〔23年度：NPO法人豊かな食の島岩城農村塾〕
- 過疎地域自立活性化優良事列表彰（総務省・1月頃）〔23年度：株式会社しまの会社〕
- 地域づくり表彰（国土交通省・1月頃）〔25年度：松山離島振興協会〕

なお、人にフォーカスを当てる施策として、県では、今年度から新たに、熱意をもって地域づくりに取り組む住民の方を対象とした研修交流会（1回／年）を実施しています（26年度は、9月11日（木）に内子町で開催）。引き続き来年度も実施する予定であり、市町を通じて参加募集をさせていただくので、是非とも、周知・御参加をお願いします。